里山学院　後援会　VOL.6　特別号　１０月

会員の皆さま、お元気でしょうか。
このところ、季候が不順で体の調整がうまくいかないと知人の多くの方が話してみえます。どうぞ、健康に留意なさってください。

さて、私達の後援する里山学院は、職員の皆さまの日々のご努力により、順調に運営されているとのことは何よりのことと思います。先日、後援会の定例役員会が開かれて、本年度の会員の加入状況や、協力してくださるお店や企業の支援の様子を聞かせていただきました。そして、学院「子ども達」を支援してくださる人々が多数みえるのに驚きました。有り難いことです。

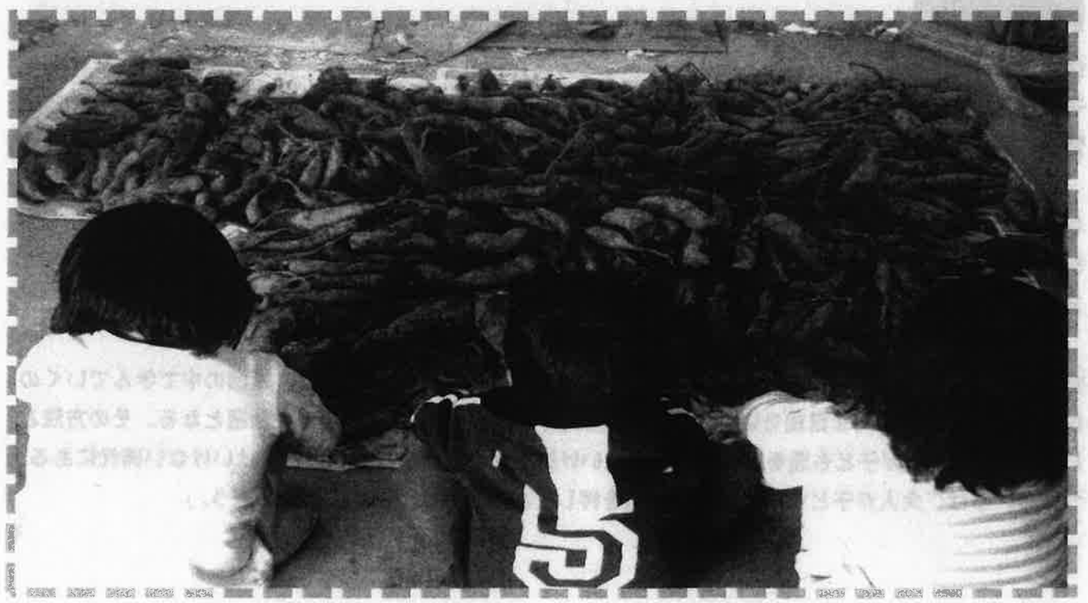
楽しい話題としましては、秋に行われる里山祭のことがありました。後援会のために色々な配慮がなされています。是非、おいでいただき楽しい一日を共に過ごしましょう。

ちょっと耳新しいニュースですが「鈴鹿里山学院」が誕生しそうです。現在の学院には65 名の子ども達がおります。これは、とても大人数で子ども達から見ればめぐまれた環境とはいえないようです。出来れば今の半分くらいの人数が最適とされています。県、国の方針もその方向にあってのことで鈴鹿里山学院は、丁度時代の要請にこたえた時宜を得た選択といえましょう。

戦後の「緑の丘の赤い屋根」の時代からやっと少人数でひとりひとりを大切にする支援施設の重要性を認識した時代に入ったと思います。

その意味で、三重の地で最も必要度と要請の高い鈴鹿の地に、里山学院が永年培ったノウハウを生かして「鈴鹿里山学院」を立ち上げ、運営することはすばらしい快挙だと思います。一日も早い開院を望んでいます。

後援会　会長　森下　眞治



「皆さまのお陰で、鈴鹿に施設が建てられます」　　津里山学院　施設長　鍵山雅夫

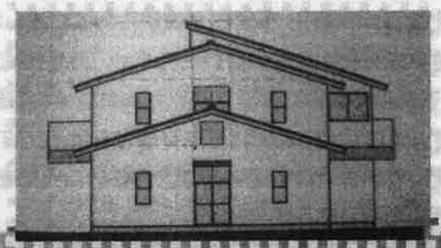
昭和６０年度現在の本体全面改築の際に、「建て直すなら鈴鹿市にしようか！」の考えがありましたが、河芸から撤退という考えに至りませんでした。しかし平成２０年度、定員６５人のこの建物は、個室がない・６５人は大規模過ぎるという思いと、鈴鹿市出身の子も多いことから、津市と鈴鹿市の両地域での児童養護施設を展開する協議が、スタートを切りました。

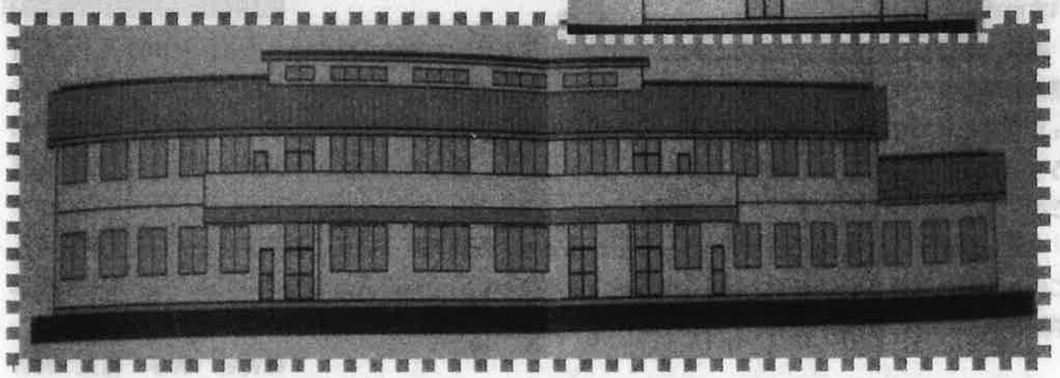
鈴鹿市に話しを持って行くと、「市としても必要性を感じている。」との言葉と、県も「市が必要と判断するなら協力する。」と返事を受けました。問題は学校・駅・国道から近い交通の便の良い所で、河芸同様近隣の理解が得られる所を探すことでした。幸い支援いただける方をご紹介いただき丸２年。多くの方のご支援を賜り、人の温かさに触れることができました。必死にやれば応えていただける人も集まり、その集団が必死に動いていただいたことは大きな財産となりました。また、世間の児童養護施設の知名度の低さと厳しい風にも当たり、“担当の子どもを何も思わず社会に出していた自分”に反省し、狭いながら楽しく過ごす子ども達に「広い所で過ごさせたい。鈴鹿の子を鈴鹿で育てたい。」の思いを形にすることができます。申請書・報告書には理事長・施設長の名前だけしか出ていませんが、膨大な書類の紙の枚数以上の人が、長い間公表のできない中‘陰’で動いていただいた‘皆さま’、“お陰さま”で施設が建てられます。

今後皆さまの思いに恥じないような施設とし、より多くの子が「里山学院に来て良かった。」と言ってもらえるように頑張ります。

『鈴鹿里山学院』

- 種別：児童養護施設
- 定員：３０名
- 鈴鹿市箕田





“鈴鹿建設への意気込み”　　里山学院　主任　福山　充孝

施設建設が始まりました。今更ながら、周辺地域にお邪魔して思うことは、我々は河芸町豊津地区に里山学院があるということを当然のことのように、もしくは意識もしていないという中で施設職員としてやらせてもらっているということが、実はそうではないということでした。

制度も何もなかったところから出発し、「とにかく人助けをしたい」という角谷ご夫妻の思いから施設という大きな家が出来、その思いの下に集まった職員さんの思いも加わって、里山学院の礎が出来たのだと思います。先輩方が歴史を作ってきて下さったお蔭で、今の里山があると思います。今も昔も地域の方々に助けられ守られてきたからこそ、ここまで来られたのだと思います。

鈴鹿市への建設は、地域へ飛び込んでいきます。切り開いていく難しさはありますが、何年、何十年か経て地域に施設があることを当然のことのように思って頂ける様に、角谷ご夫妻の思いを胸に、強い使命感を持ち、また新たな歴史を作っていきたいと思います。

箕田アレコレ

近鉄名古屋線を津より北上して、白子駅を通過し、千代崎、伊勢若松の次が箕田です。

箕田の地名の由来は所説ありますが、美田が転じて箕田になった（箕田公民館長・藤田弘幸さん談）と言われているように美しい穀倉地帯です。国道23号線より東側の海岸までがその地域です。箕田地区の自治会は11に分かれており箕田地区全体での世帯数はおよそ1700世帯です。昔は箕田地区を西より上箕田、中箕田、下箕田を大別されていましたが、現在では下箕田の地区名はあまり使われていないそうです。地区内に幼稚園、小学校、中学校があり、その他の生活に必要な施設がありますので地区内で充分生活が出来る町です。ただし保育園だけはありませんけど（笑）地区の人々は温厚で生活も充実していますので保守的な方が多いようにも思いますが、面倒見がよい方が多いです（藤田館長談）。

地区での行事で有名なのは毎年七月に海沿いの地区で行なわれる「虫送り」です。豊作祈願、大漁祈願の行事で昼は子供たち、夜は大人たちが仮装したりして笛にあわせて太鼓を打ち鳴らして汗だくになって踊るそうです。特に夜は提灯をもって大人の人がお腹の上で大きな太鼓を回して地区ごとで競いあうそうです。他の自治会でも地蔵盆や秋祭りが行なわれ、昔からの伝統の中地域のつながりが深い地区です。

今回の里山学院の新施設建設にあたっては地元で賛否両論の声があることは事実ですが地元の皆さんに少しでもご理解していただける為に後援会の皆様の中で鈴鹿市にお知り合いのある方は是非とも里山学院が箕田地区に今回お世話になることはお知らせいただき、みんなで応援していきましょう。

後援会　幹事　村主　堯春

後援会会長　森下眞治氏　里山学院理事長　安東長氏　対談

対談テーマ：「時代と共に変わりゆく子どもと必要となる支援」

会長「衣食住を提供する時代から精神面の支援が必要となって来ているのではないだろうか。時代の変化と共に、経済的な余裕が出てきた事もあり、物の支援から心の支援に変わってきた。」

理事長「表面的にも変わって来ている。食べ物がない時代から個性を尊重する時代へ変わってきたように思う。食に関しても同様。昔は栄養補給の為に食を提供していたが、今日では、食べる量は決まっていた時代から、それぞれの子どもに合わせた量へと変わった。また、食育といった形で、食の大切さまで教える必要が出てきている。」

会長「昔の子どもはあまり自己主張をしなかったように思う。親や先生の言ったことを全て受け入れていた様に思う。全てにフタをしていたのだろう。一方、今の子どもは自己主張をし過ぎて何も受け入れる事が出来ないのではないだろうか。我慢を憶え、他人の意見を聞ける子どもを育てるのも必要となる支援の一つではないだろうか。主張し過ぎる子どもに親が対応できていない。そこから、虐待が起きてしまうのではないだろうか。」

理事長「学校教育からみても、少人数性が求められている。学習面に併せて個々人の悩みを聴いていく、個別的な関わりが重要になってくる。しかし、それではなかなか社会性が育たない。」

会長「オオカミ少年という話があるように、オオカミの群れの中で育った子どもと、人間の中で育った子どもと、どちらが生粋の人間であるかは、どう育てるかその環境によるという事。学院もこれまでの営みの中で、社会で受け入れられる子どもに育って欲しいという明確な目的を持って日々やってみえる。」

理事長「今の子どもは、昔の子どもが持っていた何かを忘れているように思う。常識や良識で物事を判断して受け答えをしているだけで、本当の姿がなかなか見えてこない。子ども達は、生まれて来る時は真っ白で、その後の環境が育てている。その環境の中に在る人間が重要になってくると思う。」

会長「分別や思慮が働く人間に育って欲しいが教えて身に付くものでもない。集団の中で学んでいくのかもしれない。精神的な自由をいかに確保しながら、社会性を身に付けるかが課題となる。その方法としては、昔は大人が子ども達をただ引っ張っていけば良かったが今はそれだけではいけない時代にある。つまり、今は、大人が子どもの後ろからお尻を押してあげる様な姿勢が必要だと思う。」